

「写真用語のルーツ」

—やぶにらみ的用語解説—

AJCC会員番号0906 高井弘善

三つの写真やカメラに関する用語を取り上げ「やぶにらみ」的に解説を加えたい。

1. 写真

現代人はこの「写真」という字をなんと読むだろうか？ 多分近・現代人の大多数は「しゃしん」としか読めないだろう。

図1は一立齋広重(歌川広重、安藤広重)筆とある絵手本の復刻版で広重の画論を展開したものである。この手本の序文に「寫真(しやうつし)をなして、これに筆意を加うる時はすなわち画(え)なり」とある(図2)。拡大してみると旧字体で書かれた「寫真」に変体仮名混じりで「志やうつし」と振り仮名をうって「しょうつし」と読ませている(図3)。広重は「寫真、即ちそのまま写しただけでは絵にならない、見たまま(真)を写したのから画家の意を持って不要なものを消し去った時(草)に本当の画(え)がえられる」と言いたいのであろうが、今の写真はまさに「しょうつし」である。

江戸時代の文献を見ると「しょうつし」は「生写」と書いてあるのが普通のものである。「しょうつし」に「写真」と言う字を当てたのは、広重の創案なのか、江戸時代末期1800年代中頃にはそのような言葉が存在したのかは分からないが、広重は何の断りもなく使っているのが、多分その頃の「写真」=「しょうつし」が一般的に用いられていたであろう。

江戸時代の文献を見ると「しょうつし」は「生写」と書いてあるのが普通のものである。「しょうつし」に「写真」と言う字を当てたのは、広重の創案なのか、江戸時代末期1800年代中頃にはそのような言葉が存在したのかは分からないが、広重は何の断りもなく使っているのが、多分その頃の「写真」=「しょうつし」が一般的に用いられていたであろう。

広重と江戸末期から明治にかけて活躍した写真師の時間的関係を見ると、広重の手引き書発刊年1849年のわずか12年後には江戸に写真館が設立される。その後横浜や長崎に相次いで写真師が活躍し始めた。彼等がいつから「写真」という言葉を使い始めたのかは分からないが、幕末に日本に入ったダゲレオタイプなどのカメラを、「しょうつし」ができることから「しょうつし」できる機械「すなわち「写真機」、また撮影した結果を「写真」と呼ぶようになったのであろうと思われる。



図1 広重「繪本手引草」中扉



図2 広重の序文

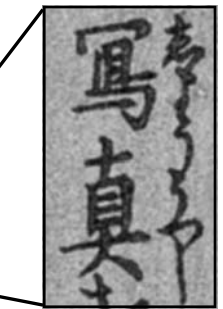


図3 図2の部分拡大図
変体仮名混じりで
「志やうつし」と読める。
図1~3は芸艸堂発刊の豆
本「繪本手引草」より

2. パトローネ

35mmフィルムをカメラに日中装填できるような容器に所定枚数巻き込んだものを、ドイツ語圏と日本ではパトローネと呼んでいる。これを英語圏ではフィルム・カートリッジ(または単にカートリッジ)、またはフィルム・カセット(カセット)と、フランス語ではカルトゥシュ(cartouche)と言い、イタリア語、スペイン語も同じ系統の言葉である。ドイツ語以外にカートリッジの意味でのパトローネという単語は見つからない。

写真1は米国のアンスコ社が1927年に発売したアンスコ・メモと専用フィルム・カートリッジである。このフィルム・カートリッジは本体が木製で真四角な断面を持つ。フィルム入りと空のカートリッジを使い、撮影済みのフィルムを空のカートリッジに押し込む方式である。生フィルム入りカートリッジはアンスコ社(1929年アグファと合併しアグファ・アンスコとなる)が特許権をもっており、アグファが供給した。販売されたのが米国のせいか箱にはMemo Cartridgeと書いてあり、パトローネ



写真1 アンスコ・メモ用フィルムカートリッジ



写真2 アグファ・メモ(左)と
カラート用カートリッジ(右)

写真3 コダックの
フィルム・パトローネ

(Patorone)という言葉は使われていない。アグファは1936年にラビード形式の35mmカメラ「カラート」と専用12枚撮りフィルム・カートリッジを発売した(写真2右)。他にアンスコ・メモから発展した24×36mm判アグファ・メモを1939年に発売した。これはカートリッジの方式や寸法はアンスコ・メモと同じだが、カートリッジ本体が金属製となっている(写真2左)。

1934年にコダックA.G.が35mmフィルムを使うカメラ「レチナ」を発売し、それに使うフィルム・カートリッジ(パトローネ)を開発してコダック社が発売した(写真3)。このフィルム・カートリッジのコダック番号が「135」である。

1934年発売のレチナ I 型(#117)のドイツ語マニュアルにはTageslichtpatronen(デイトライト・パトローネ)と書かれており、その登場の初めから「パトローネ」という言葉が使われていたのである。ではこの「パトローネ」とはいったいどこから来たのだろうか？

辞書には、「パトローネ:①35ミリフィルムの容器。カートリッジ。②薬莖(やつきょう)。薬包。」広辞苑(第3版)とある。パトローネという言葉は、もう少し上流を探ると、どうやら少し危険なものから来たようである。

◆ もう一つのパトローネ

やや物騒な話になるが、銃器の弾薬もパトローネ(Patrone ドイツ語)と呼ばれている。

英語ではカートリッジ(Cartridge)、フランス語ではカルトゥシュ(cartouche)と言い、写真用語と全く同じ用いられ方である。銃器の「パトローネ」は弾丸、発射薬(弾丸推進用の火薬)、雷管、それらを収納する薬莖を含む完成した弾薬(完成弾)を意味する(図5)。

その銃器用パトローネの語源は14世紀中頃に遡ると言われている。火縄銃などの先込銃は、戦場で火薬量を計って銃口から注ぎ込み、次いで弾丸を脱落防止用の紙などと

共に押し込んでいた。しかし戦場で火薬量を正しく量るのは難しい。多すぎると銃を破壊して射手を負傷させたり、火薬不足で弾が飛ばない等の不具合があった。それを解消するため適量の火薬と弾丸をクラフト紙のような丈夫な紙で包んだソーセージ状のもの(図6)にして、10~20個付けた帯を肩から斜めに掛けて携行するようにした。ドレスデンの博物館には、16世紀末、ザクセン選帝侯クリスチャン一世の兵士によって使用されたと言う記録が残っている。これをパピア・パトローネ(Papierpatrone)と呼んだ。この紙包みの火薬側を破いて銃口から火薬を注ぎ込み、その後弾丸を紙と共に擲杖で詰め込む(図7)。従来の半分ほどの20秒ぐらいで発射準備が整ったと言う。日本でも戦国時代(15世紀末~16世紀末)に「早合(はやごう)」と呼ばれるものがあった。木、竹、革または紙を漆で固めたものを筒状に成型し、その中に弾と火薬を入れたものである。ヨーロッパ伝来ものを改良したのか、独自考案なのかは不明である。

時代を経て1870年のフランスとプロイセンが戦った普仏戦争で、ボルトアクションの元込銃[プロイセンは1841年制式のドライゼ(Dreyse)銃、フランスは1866年制式のシャスポー(Chassepot)銃]が大々的に用いられた。この銃に用いられたのが、雷管(撃針で衝撃を与えると発火する)、発射薬および弾丸を紙製の薬莖で包んだ完成弾であった。これもドイツではPapierpatrone(パピア・パトローネ:紙薬莖弾)と称した(図8および9)。

これが後に図5の近代的な金属薬莖の「パトローネ」へと発展したのである。

銃と同じように安全かつ簡単にカメラに装填できるので、「日中装填できる容器入りフィルム」を発明したドイツではフィルム用も銃器用語の「パトローネ」を用いたのである。な

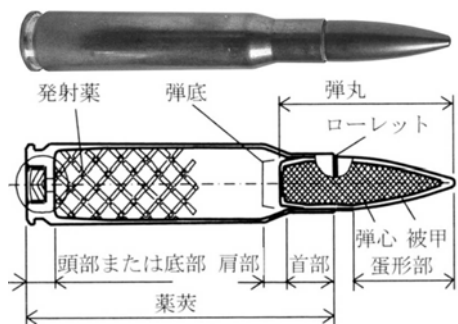


図5 パトローネ(完成弾)

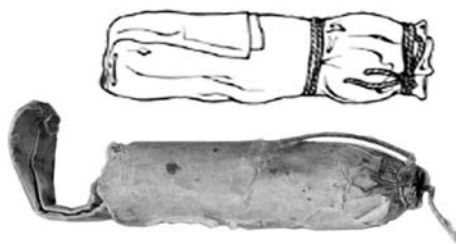


図6 弾丸と1発分の発射薬を丈夫な紙で包んだ
パピア・パトローネ(Papierpatrone)

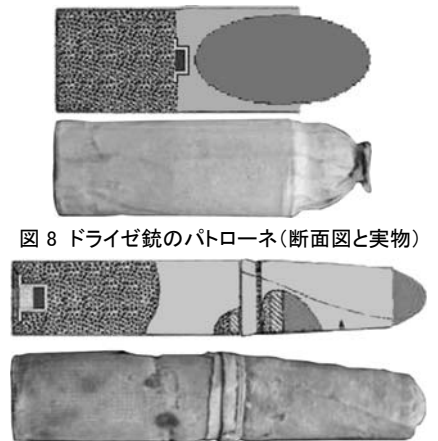


図8 ドライゼ銃のパトローネ(断面図と実物)

図9 シャスポー銃のパトローネ(断面図と実物)



図7 パピア・パトローネの
使い方

Anleitung für die Kodak-RETINA-Kamera

24×36 mm

36 Aufnahmen auf Normal-Kinofilm
in Tageslichtpatronen.

図4 レチナ I 型(#117)のマニュアルの一部
Tageslichtpatronen入り36枚撮りシネ・フィルムと書かれている。

お日本の辞典ではフィルム・パトローネは「フィルムを入れる容器」と言っているが、フィルム、スプール、それを収納する容器(カプセル)を含む完成体として定義すべきであろう。

3. バヨネット

バヨネット・マウントを最初に採用したカメラが何であったかは寡聞にして知らないが、35mmカメラではレンジファインダー・コンタックスが最初であるのは間違いないだろう。1936年発売のコンタックスII型の英文マニュアルには「インターチェンジャブル・バヨネット・マウンティング」と書かれている(写真4)。この「バヨネット」という言葉はどこから来たのだろうか？

スペイン国境に近いフランス・バスク地方にバイオンヌと言う町がある。バイオンヌは12~15世紀の間、イングランドの支配下にあり、フランスとの間に争いが絶えなかったと言う。そ

V. The Lens and interchangeable Bayonet Mounting



写真4 コンタックスIIのマニュアル

ういう地域にあったため、短剣(Dagger)や先端のものが「バヨネット」と呼ばれていた。銃剣との関係は明らかではない。

◆ 銃剣としてのバヨネットの起源

銃剣はバヨネットと呼ばれる。バイヨンヌ産の短剣との関係を調べてみると四つの説に分けることができる。

- ① バイヨンヌで起きた農民間の争いで、とっさに短剣を銃口に差し込んで戦ったことから「バヨネット」と呼ばれた。
- ② 狩人がイノシシなどの危険な猛獣狩で打ち損じたときの護身用として先端のものがナイフを銃口に取り付けるようになった。このナイフの産地バイヨンヌから「バヨネット」と呼ばれた。
- ③ バイヨンヌ産の短剣(Dagger)や先端の



写真5 先込銃(マスケット銃)と銃剣

- がったナイフが「バヨネット」と呼ばれていた。銃剣との関係は明らかではない。
- ④ 1650年頃の書籍に二つのボタンで腰帯に吊すことができる短剣が産地のバイヨンヌにちなんで「バヨネット」と呼ばれたとある。これも銃剣との関係は明らかではないが、ボタンで着脱できることから来たのかも知れない。

①と②は、同工異曲で、上手くできすぎていて、伝承の域を出ず信憑性に欠ける。③は最初から銃剣とのつながりをあきらめている。④は当時の書籍の記述であるから信憑性は高いが、銃剣とのつながりが不明瞭である。と言うことで、なぜ銃剣がバヨネットと呼ばれたのかは不明である。いずれにせよ初期(17世紀頃)の先込銃(Musket銃)と銃剣の装着方法はまさに、今で言うバヨネット・マウントそのものであった(写真5~7)。この方式は13世紀、トルコのアル・ジャザリ(Al-Jazari)が発明した「ろうそく時計」用に考案したものが世界初だそうである(図10)。図ではバヨネット・マウントがどこに、どの様に使われているのかわからないが、炎が出ている下のキャップ部にあるものがそれである。この構造を模式図的に画くと図11になる。両側に二つの突起の付いた内筒に、この突起を受ける切り欠きを有する外筒を押し込んで少し回すと結合する様になっている。ワンタッチで結合できる。

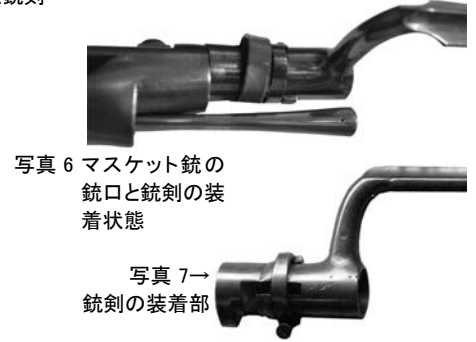


写真6 マスケット銃の銃口と銃剣の装着状態

写真7→銃剣の装着部

この方式が上述のように17世紀頃銃剣(バヨネット)の着脱方式に使われたので、バヨネット(銃剣)継ぎ手と呼ばれるようになったのであろう。カメラのバヨネット・マウントは、これから発達しずいぶんしっかりしたものであるが、小型電球とソケットとの結合は今でも図11と全く同じ簡素な方式である。またフラッシュ電球にも多く見られた。街頭で見かける消火栓の継ぎ手もこの方式の変形である。いずれにせよワンタッチで着脱できるということが大事であることは言うまでもない。

(終わり)



図10 アル・ジャザリのろうそく時計

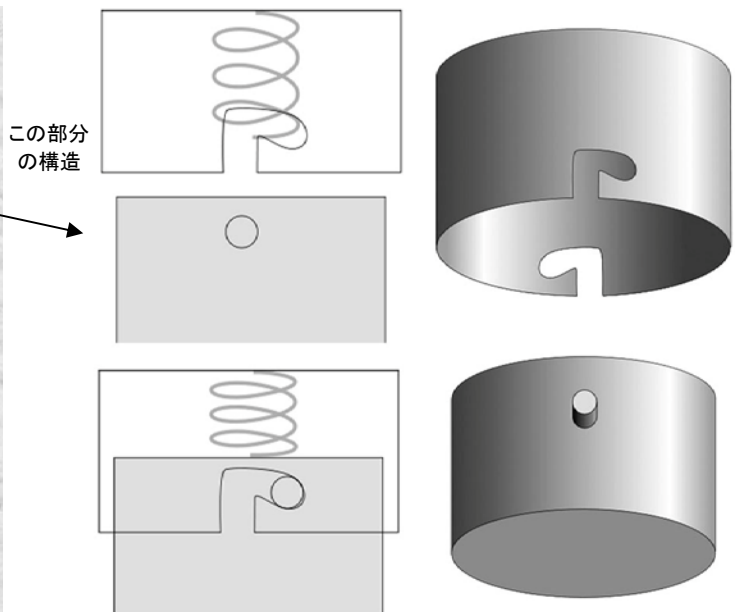


図11 バヨネット継ぎ手の模式図